

「不登校」と生きる
—はっきりとはわからない それが辛いのです—

松 木 宏 史*

Living with Truancy (Futoukou)
— I don't know for sure. That's the hard part. —

Hiroshi Matsuki*

キーワード

「不登校」, 学校 (教室), 居場所, 家族

はじめに

「我が家の朝はまさに時間との戦いだ。小6と小4の息子をたたき起こして支度させつつ、2歳の娘の着替えもしないといけない。笛吹ケトルが鳴り、洗濯機終了のブザーが追い打ちをかけ、小4が牛乳をこぼす。小6は体操服があらへんと騒いでいる。ツレアイは夜勤明け、ひとりでアタフタ、ということも。出発!という段になって娘が『ウンチでた…』。」

これは、筆者が10年近く前に書いたコラムの一部である。寄稿してからほどなくして、にぎやかで楽しいこうした光景は過去のものとなった。子どもたちがいわゆる「不登校」¹になったのである。

筆者は社会福祉学を専門とする教員である。おもに地域福祉と貧困問題を両輪に勉強・活動してきた。妻も福祉施設で働いている。様々な社会問題に対して、暮らしや人権といったキーワードで考えてきたし、子どもたちに対しても人格を重んじて接してきたつもりであった。社会問題に対して単に同情するのではなく、問題が生み出される構造に目を向ける。そうした話を子どもたちにかみ砕いて話したこともあった。子どもたちも、学校での出来事や少年野球での自慢話を屈託なく話してくれていた。親子の意思疎通はかなり図れていると思っていた。我が家には、辛いことがあっても話しやすい雰囲気があると思っていた。

そうした中で、いくつか兆候はあったにせよ、長い長い「不登校」とのつきあいが始まるとは思ってもみなかった。そしていざ事態に直面すると、様々に学んできた知識を生かすこともできず、ひたすらに手探りで右往左往していることを自覚せざるを得なかった。子どもたちが思春期・反抗期を迎えても我が家なら大丈夫という自信は吹き飛んでいた。

* まつき ひろし：大阪国際大学短期大学部教授 (2022.12.2 受理)

この研究報告では、親として、また曲がりなりにも社会福祉学を修めてきた教員として子どもの不登校にどのように向き合ってきたかを記述していく。中途半端な専門性は役に立たず、ひたすらに規範に縛られていた初期のころから、10年たった今も、当事者として考えあぐねてきた正直な思いも述べていく。最後に、子どもたちの「不登校」と向き合ってきた「今の学校」への疑問についても述べる。

1. 「不登校」とのつきあいが始まる

(1) 「学校に行かれへんくなるよ！」

	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022
長男	小1	小2	小3	小4	小5	小6	中1	中2	中3	高1	高2	高3	大1	大2	大3
次男	保育所	保育所	小1	小2	小3	小4	小5	小6	中1	中2	中3				
長女				誕生	保育所	保育所	保育所	保育所	保育所	小1	小2	小3	小4	小5	小6

我が家の「不登校」早見表 網掛けの濃い時期はほぼ登校していない

きっかけはおそらく些細なことだったのだろうと思う。もともと万事にムラッ気が多かった次男だが、小学2年生後半になってから、徐々に行き渋りの頻度が高まってきた。当時筆者は大阪府内の専門学校に勤めており、朝に家を出るのは家族でいちばん最後のことが多かった。しかし私が出勤する時間が迫っても次男がぐずぐずしていることが多くなってきた。ギリギリまで待ちつつも結局登校できず、私の職場の保健室で過ごす日もあった。とはいえ、できるときにはあっさりと登校するので、戸惑いながらも日々過ごしていた。

3年生に上がってから、徐々に登校できない日が多くなってきた。この時期に印象に残っているのは、朝の時間に担任が我が家にやってきて次男に説得を試みたときのことだ。次男は走って逃げた。マンションの廊下を上へ下へと逃げ回った。最終的に階段の踊り場から動こうとしない次男に向かって、駐車場から担任は叫んだ。「このままではずっと学校に行かれへんくなるよ！」。

なんということをする人だ、とさすがに私も妻もあきれ返った。次男を叱咤しようとしているのか、それにしては嫌な追い込み方をする人だ、と不信感すら覚えた。結局、その担任の予言通り(!)次男は徐々に学校に行かなくなった。

この頃の私の認識は「まさかうちの子が、なぜ？」であった。社会福祉を学び研究する立場として、「不登校」について見聞きすることがなかったわけではないが、まさか自分の家族に降りかかるとは考えていなかった。おそらく妻も同じような思いだっただろう。夫婦二人して次男をなんとか学校に行かせることに必死になっていた。いまから思えば、「不登校の子どもにやってはいけない関わり方」を一通りやっていた。

例えば、手を引っ張って校門まで連れていく、毎朝のように叱責する、そして正直に書くが手を上げたこともあった。もし自分の友人がこのような行動をとっていたなら、当時

「不登校」と生きる—はっきりとはわからない—それが辛いのです—

の私でも「もう少し自分の子どもに寄り添ったら」などと役にも立たない助言をしていただろう。理屈ではわかっているが、あるべき対応ができず感情に揺さぶられてしまう。これは自分でもショックであった。厳しい対応をしては自己嫌悪にさいなまれるという、親としてもつらい時期であった。

(2) 二段ベッドでの籠城

まもなく、長男（当時小5）もやや遅れるようにして行き渋り始める。朝になると二人して二段ベッドの上下で籠城を始めるのだ。私も妻も出勤時間とのせめぎあい、しっかり時間をかけて話ができないことになり焦りを感じていた。仕事から帰ってきた後にはできる範囲で話を聞き、いったんその時には落ち着くのだが、朝になると同じことの繰り返しであった。

そのうちに長男は、一度は家を出るもののマンションの駐車場に隠れて時間をつぶし、父母が出勤したタイミングで家に戻るようになっていた。たまたま忘れ物を取りに帰った私と鉢合わせしてそれが露見した。私は子どもが嘘をつかざるを得ないような状況に追い込んでいたことを恥じた。親の未熟な対応でそこまで子どもを追い詰めていたのだ。ほどなくして長男もほぼ通学しなくなった。

(3) 命名「はあ〜と病」

最初の転機は思いがけない形でやってきた。もはや朝の恒例行事となってしまった二段ベッドでの押し問答の最中、次男がこちらをにらみつけてきたのだ。その表情は9歳とは思えない見たこともない形相で、とても悲しい目をしていて、なだめすかして何とか学校へとそのことで頭がいっぱいだった私は、次男の顔を正視してやっと我に返る。「ごめん、つらいのは(次男)やんな。ほんまに嫌やったんやな。もう無理に学校に行けとは言わん。」と言葉が口をついて出てきた。

そしてようやく、小学校のスクールカウンセラーにつながることができた。と言っても私たち夫婦が月に1回程度話を聞いてもらうだけである。しかし第三者に相談できるようになって、自身の思考を冷静に振り返るきっかけになった。

あわせて、長くキャンセル待ちをしていた児童精神科に空きが出て受診することになった。次男はこのクリニックでセラピーを受けることで自身の感情を整理できるようになった。これまで険しい顔をしてため息をつくだけだったのが、学校にいけないしんどさを言語化できるようになったのだ。次男曰く「学校に行こうとするとはあ〜となる」そう、これ以降次男の不登校は「はあ〜と病」と命名された。

しかしまだこのころは「何とか学校に行ってくれないか」「学校に行ければ問題解決」という考えにとらわれていた。主治医からの的確なアドバイスも活かすことができず、右往左往するばかりであった。「学校に行くことがゴールですか」「まずはご家庭で安心して過ごせることが大切です」主治医からのこうした言葉がいかにも的を射たものであるのか、当時の私は理解することができずに「抽象的な指示ばかりで分かりにくい」などと思っていた。

(4) つらい天秤

筆者は知らず知らずに「学校とは通って当たり前のところ」という規範に縛られていた。自分の考え方が保守的であることは自覚していたが、思わぬ足かせであった。「学校に行ってほしい」と願う心の奥底には、もちろん子どものことを心配する部分もあったが、規範意識にとらわれていたことは否定できない。「学校に行って勉強する」ということはそれだけ私自身に深く内面化されていた。

また、カウンセラーや主治医など相談できる相手が見つかるものの、いま思えば筆者は「自分が納得できる答え」を探していたように思う。熱心なアドバイスやいただいた提案も、愚かな考えの前にスルーしていた。

唯一当時の自分を認められるとしたら、最低限次男からのSOSに何とか気づけたことだろう。もしあの二段ベッドでの押し問答の中で次男の悲しい目に気づけていなかったらと思うとぞっとする。ギリギリのところまで彼の思いを受け取れたことで、何とか踏みとどまることができた。

またこのころ、妻の方が仕事を一時休職して子どもたちと腰を据えてかかわってくれた。そこから見えてくるものもあった。なにによりよくわからなかった子どもたちの日中の様子をつかむことができた。子どもたちも平日は母親が、研修日や週末はわたしとどちらかが常に家にいることで落ち着きを取り戻してきた。しかし私は授業に穴をあけるわけにいかず、休職までは決断できなかった。もしかしたら、それは言い訳で仕事に逃げていた部分もあったかもしれない。いずれにしても、我が子と仕事を天秤にかけないといけない状況は辛いものであった。

大牟羅良(1958)『ものいわぬ農民』にこんな一節がある。熱があった赤ちゃんを、忙しいあまりに受診の機会を逃しているうちに亡くしてしまった農夫が「百姓はじえ、働がねえば食えねえじえ。食うべえと思えば、ワラス見られねえ。見ないでれば、こっただことになる…」と嘆くのだ(大牟羅1958:8)。仕事と子どもとの板挟みになっていた時期、この嘆きを思い出さない日はなかった。

(5) ところで休日はどう過ごしていたか

とはいえ、つらいことばかりではなかった。長男次男ともに体を動かすのが好きで、一年生の時から地域の学童野球チームに入っていた。最終的に長男はシニアチーム(高学年)、次男はジュニアチーム(4年生以下)の主将となり、私はチームの育成会会長になった。

ありがたかったのは、チームの指導者が二人とも不登校状態にあることを受け入れてくれたことだ。平日は学校に行かずほとんど家で過ごしていた子どもたちであったが、土日祝日は野球へと通った。普段の様子と打って変わって、二人ともグラウンドでは生き生きして見えた。

ただ、ほかの保護者のなかには「あそこは学校にも行かせず野球だけさせている。ずるい」というような反応もあったようだ。しかし当時は気にする余裕すらなかった。

「不登校」と生きる—はっきりとはわからない—それが辛いのです—

2. 「不登校」とのつきあいが長くなる

(1) 長女の笑顔に癒される

2011年の正月に生まれた長女は天真爛漫であった。兄弟とは歳の離れた彼女が成長するにつれ、家の中が穏やかになってきた。「不登校」のしんどさ辛さに関係なくにこにこ笑いながら話しかけてくる長女に、兄たちもかなり癒されていた。ともすればピリピリムードが漂いがちだった我が家にとってまさに救世主であった。次男は彼女のおぼつかない言葉を書きとめて手作りの「語録辞典」を作ったほどだ。わがままいっぱいの彼女に翻弄されながらも、落ち着いた日常を過ごすことができた。

(2) 長男なりの「不登校」とのつきあい方

長男は「このタイミングで学校に行く」と決めたら行く」という意思のかたさというか、律義さがあつた。しかし心と体のバランスはうまく取れないようだった。運動会前日に発熱したものの何とか解熱し参加して、帰宅してから念のため熱を測ると再び39度の高熱、ということもあった。担任との相性はあまり良いとはいえなかった。音楽の先生も大の苦手になっていた。しかしこれも行く」と決めた音楽発表会には参加した。楽器は練習していないため演奏できないのにどうするのかと心配しながら鑑賞していたら、曲の最後に大きくシンバルを鳴らしていた。

このころの長男は浮き沈みを見せながら平日はなんとか耐え忍び、土日に野球で発散というペースで小学校高学年を過ごしていた。

(3) 長男の突き当たった壁と挫折

そして中学進学の時を迎えても不登校状態は続いていた。本人の希望もあり前々から相談していたボーイズリーグのチームに入ることになった。ただ残念ながらそこでは「不登校であること」について理解してもらえなかった。硬式野球のクラブチームでは仕方なかった面もあった。私自身もコーチや監督から「不登校は共働きによる愛情不足ではないか」「朝起きられないなら鉄分のサプリを取るといい」というステレオタイプな「アドバイス」をいただいた。

ボーイズリーグの練習は平日放課後と土日祝日であった。長男はさすがに平日には外に出られず土日の練習にのみ参加していた。しかし、なまじ体が大きく肩も強かったため「平日にも来るように」とコーチに厳しく言われてつらい思いをしたと思う。

その矢先に古傷のヒジ関節痛が悪化してしまい、手術することになった。野球小僧の長男が半年以上キャッチボールも禁止になってしまった。大好きな野球ができなくなりボーイズも退団した。このこともあってか中学1～2年は辛そうに過ごしていた。

(4) 次男なりの「不登校」とのつきあい方

次男は小学5年に進級し、慣れ親しんだジュニアチームからシニアチームへ移行することになった。コーチの皆さんは粘り強く指導して下さったが、長男がいたころの強かったチームから代替わりしてすっかり環境が変わってしまった。そのことになじめず、次男

も野球チームを辞めることになった。

いっぽう学校のほうは、理解ある担任の先生には結構なついていた。先生に誘われて放課後に登校し、将棋やバドミントンをして帰ってくるなどしていた。クリニックの方は好きだったセラピストの退職に伴ってだんだん通わなくなっていくた。

3. 学校に行かないなりの生活

(1) 「放課後に野球だけでもしに来たら？」

長男もいよいよ中3になり、進路を気にせざるを得なくなってきた。しかし親としては全く糸口を見つけれられていなかった。考えあぐねているときに、新しく赴任してきたスクールカウンセラーとの出会いできっかけをつかむことになった。はじめは小学生の時と同じように、親のみが面談してもらっていたが、ある日長男を誘ってみると「行ってみようかな」というので連れ立って面談に向かった。そこでカウンセラーとウマが合ったようだ。長男も積極的に会話を楽しんでいた。面談を重ねるうち、カウンセラーの尽力で中学野球部の顧問から「放課後に野球だけでもしに来たら？」とお誘いを受けた。ヒジも完治しうずうずしていた長男はとにかく参加してみるようになった。

親としては果たして周りに受け入れられるのか心配だったが、顧問の先生のフォローもあり春の大会で背番号20を頂くことになった。長男が裏方仕事も手を抜かず取り組んだことで周りからも徐々に信頼されるようになってきた。最後の大会ではセンターのレギュラーと救援投手を務め、最終打席でホームランを放つなど、今までの学校生活でも指折りの（そして久々の）充実した日々だったのではないだろうか。

相変わらず授業にはほとんど出ることはできなかったが、クラブをやり遂げていよいよ受験を意識しだす時期となった。進学先は色々調べた結果、大阪府立のエンパワメントスクール²を目指すことになった。私学にはどうせ行かないと志望校のみの単願で、無事に進学することができた。

(2) 保健室とステップルーム

長女は小3の初期段階から学校がしんどくなり始めてきた。いろいろ話を聞いてみると、他人が先生に怒られているのを見るととても辛くなるという。徐々に学校から足が遠のき、いつしか「不登校」になった。ただそのころには小学校も「不登校」の子どもに対して支援策が一定程度見られるようになっていた。長女ははじめ保健室登校を週に2回程度続けていた。しかしコロナ禍で保健室登校ができなくなってしまった（保健室本来の機能に戻すため）。すると校内の「ステップルーム」（「不登校」や行き渋りなど教室に通いにくい子どもたちの居場所）を紹介された。行ってみるとそこでしっかり受け止めてくれる先生と出会うことができ、今度はそちらに週に2回程度通い始めるようになった。

(3) 部活動に救われて

次男も中学に進学した。制服は作ったものの中学1年～2年はほぼ袖を通さない状態であった。

「不登校」と生きる—はっきりとはわからない—それが辛いのです—

彼が中学3年時に、また野球部の顧問から誘っていただき、野球部の練習に参加するようになった。人見知りの強い彼は友達付き合いで苦労しながらも、週に何度かは練習に通い、体を動かした。最後の大会では背番号ももらいベンチに入り、打席にも立つことができた。久しぶりに太陽のもとで汗を流し、大声で仲間を鼓舞した。

長男次男の経験から、部活動の可能性について考えさせられた。カウンセラーと先生の好意で部活動に参加できたことで、二人の自信や思い出にもつながったと感じている。いま部活動の外部委託化が議論されているが、やはり活動には教員の関わりがあってこそではないだろうか。もし完全外部化されていたら、二人とも中学時代行き場がなかったかもしれない。

次男の進路については、いろいろ考えて通信制高校と長男が通っていた高校を見学に行った。しかし本人から「今すぐ進学は想像できない」と申し出があり、早い時期の進学を断念することになった。

(4) 「福祉の先生」なのに

このように子どもが3人とも「不登校」となった。長男次男で手探りだったぶん、長女には早い段階で「受け止める」ことができたと思う。また長男次男も自分たちの経験を踏まえて長女にアドバイスしてくれるので、かなり助けられている。

ところで筆者は、2012年度から保育士養成校で社会福祉の教員となった。にもかかわらず「子ども家庭福祉」の授業を担当できないほど辛かった。実際に担当するよう言われていたが断っていた時期があった。「不登校」や集団になじめない子どものことを授業で取り上げ冷静に語る自信がなかったからである。しかし、「不登校」と「つきあう」なかである程度は状況を客観視できるようになり、2015年あたりから子どもに直接関連する授業を担当できるようになった。今では「子ども家庭福祉」や「子ども家庭支援論」は筆者が最も力を入れている科目となっている。

4. 「不登校」と生きる

(1) 長男の現在地

高校では中学1年の勉強から復習してもらい、コツコツと継続できた。時折朝につらそうなこともあったが、うまく学校になじむことができ、体調不良以外ではほぼ通学できた。部活動は野球部から漫画研究部、もう一度野球部そして漫画研究部と渡り歩いていた。全くと言っていいほど授業出席できなかった中学時代の勉強からやり直せたことで大学進学にもつながった。

現在大学生で一人暮らしをしているが、弟妹や親と離れたことで自分なりのペースで暮らしている。それが良い循環となっているようだ。休日は地元の草ソフトチームでおじさん達にかわいがられている。

(2) 次男の現在地

次男は中学卒業以降無所属である。基本的には家でゆっくり過ごしている。一人暮らし

にチャレンジしようとしたこともあったが、今は背伸びせず家で過ごしたい様子である。料理が得意で、親が忙しい時には妹に振舞ってくれている。

将来どうしていくかという不安はやはり大きいようで、時折相談ともつかぬ話をする。結論はすぐには出ない。葛藤と向き合いながら足元を固めている時期ではないかと見守っているところである。

(3) 長女の現在地

ステップルームの先生が転勤してしまい、通う頻度は少なくなった。その代わりというわけではないが、友達がよく遊びに来てくれる。家で仕事をしていると話し声がうっすら聞こえてきたりするが、誰も娘を強引に学校に誘ったりしないのがイマドキだなあと感じている。趣味としてはハムスターの飼育、キャラクターグッズ集めを楽しんでいる。

中学に進んだらどうなるのか、中学に行けなくても高校から先に進むことはできるのか尋ねてきたこともある。漠然とした不安はあるのだろう。手探りで進んでいる彼女をどうサポートするか親としてしっかり考えたい。

(4) 親としては

子どもが3人とも「不登校」になったことで、親として試される場面を多く経験することとなった。子どもが「不登校」でなかったら気づかなかったであろうことも多々あった。例えば学校のシステムそのものが「登校」を前提に構築されていることだ。子どもが不登校状態でもPTA活動に参加せざるを得ない時があり、複雑な思いをしたこともある。「登校」を前提とするのは致し方ないかもしれないが、登校できない状態になったときに置いてけぼり状態になるのは改善の余地があるのではないか。

一方で子どもの自立に関しての考え方は明確に変わった。かつてはあまり考えず「18歳になったら家を出なさい」などと子どもたちに話していたが、実家でゆっくりその子らしく過ごすのもいいではないか、と思うようになった。現在ひとり暮らしをしている長男にも、いつしんどくなって帰ってきてもいいようにと考えられるようになった。

そして何と言っても研究のスタイルが問われた。これまで社会福祉学のなかでも地域福祉と貧困問題を軸に勉強を続けてきたが、否応なしに「自分の問題」として子ども施策・子ども支援に関心が向くようになってきた。その際、これまで取り組んできた「政策を批判的に検討する」視点を生かせるようにと考えている。今後はこれまで取り組んできたテーマと合わせて、特に公教育のあり方、地域に根差した子どもの居場所づくりの勉強を進めていくことになると思う。

5. 「不登校」を考える

(1) 「不登校」の原因を探ることの不毛さ

通信制高校生・高卒認定・高卒生・中卒生・高校中退・不登校・進路変更・大学中退・社会人と幅広い人々を対象とする予備校で教員をしている中島浩籌は、近著で不登校の理由・原因を考える困難について以下のように述べている。

「不登校」と生きる—はっきりとはわからない—それが辛いのです—

「私自身、学校を辞めるにいたった理由・原因を考えると、何人かの生徒との出会い・出来事を想起します。そして、それらの出会いが学校を辞めることにつながっていったのは確かです。しかし、それがどんな意味を持ったのかははっきりしません」(中島 2021 : iv)。さらに、不登校をストレスとの関係で論じてしまうと、「『不登校』はメンタルの問題なのだという心理主義的な見方が強ま」ってしまい、「学校に通えなくなったのだから、何か相当つらいことがあったのではないか？」という周囲のまなざしに押されて「強いストレスを生じさせるような出来事に言及しないと納得してくれない」状況になると指摘している(中島 2021 : 105)。この描写は、不登校状態の子どもを取り巻く環境をクリアにとらえている。結局「不登校」の原因とは「はっきりとはわからない、それが辛いのです」(中島 2021 : 94)ということに尽きるだろう。

私たち家族はこの10年様々な人から善意でもって、そして時には悪意も含んで「なんで学校に行かへんの？」と問われ続けてきた。じつは「不登校」のつらさの大半は、答えの出ない「なぜ？ どうして？」を浴びせ続けられることにあるのではないかと考えている。不毛な原因探しよりも、今その子どもが安心できる環境づくりに関心が向けば少しは生きやすくなるのではないだろうか。

(2) 学校、特に教室という場について

子どもたちの様子を見ていてどうしても気になったのが、保育所と義務教育学校との違いである。保育所や学童保育では、子どもたちは目立って渋ることもなく過ごすことができていた。長男などは学童保育を「卒業」しても、次男に会うという名目で毎日のように顔を出し、先生のご厚意でおやつまでせしめていた。いまは安全管理等の問題があるため、ここまでオープンにはできないだろうが、子どもに対して開かれた場所であることは確かであった。

特別支援教育においても、保育実践と一脈通じるところがある。「どんな子どもであっても誰をも受け入れる、ちょっとごちゃごちゃした場所」であることの安心感は、何物にも代えがたい。なによりそこで重要視されている「合理的配慮」はすべての子どもに必要とされる理念である。

一方で学校、特に教室という場ではどうだろうか。「小1の壁」なる言葉ができて久しい。保育所で過ごしてきた子どもたちが小学校に入学して様々な「壁」に突き当たるといふ問題は果たして解消されているのか。そもそもなぜそこに「壁」があるのか。理由として環境の激変がよくあげられるが、その変化のベクトルが「子どもにとって悪い方に」向いているのではないか。

保育所での自由な環境に慣れている子どもにとっては、小学校での大集団一斉教育は確かにカルチャーショックだろう。授業の間は「とにかく座っている」という文化、ルールから逸脱すると担任からみんなの前で叱責されるという状況は、特に低学年の間は慣れるのに精いっぱいという子どもがいてもおかしくはない。

「不登校」とは、子どもが学校になじめないから起こるのか、学校が子どもに寄り添わないから起こるのか、考えてみる余地は大いにある。また、学校が大集団に対して一斉教育

を行わざるを得ない環境になっていることについても、検討が必要である。そもそも担任の配置は適正なのか、ひとクラスの人数を減らす必要はないか、もっと言えば教員の労働条件を改善して、熱意のある人が多く集まるように変えていけないか、こうした措置が「不登校」の改善に即座に役立つとは思えないが、学校が少しでも風通しがよく居心地の良い空間になればと願っている。

(3) 教室以外の居場所について

教室への登校に必ずしもこだわらなくてもいい、という考え方もある。3人の「不登校」と付き合ってみて感じているのは「子どもの居場所は、ありそうでないし、なさそうである」ということだ。

まず相談相手として、スクールカウンセラーは万能ではないことを痛感した。身もふたもない言い方をすれば、結局は「相性」の問題ではなかったかと思う。もちろん子どもたちに部活参加への道を作ってくれたカウンセラーには非常に感謝している。彼女は丁寧に話を聞き取ってくれて、私たち親子が言語化できなかった思いを形にしてくれた。ただ彼女以外のカウンセラーがどうだったかと問われると、「確かに話は聞いてくれたけれど…」という思いである。

一方で保健室、ステップルームについてはありがたいというほかはない。ある子どもにとって教室が安心できない場所だとしても、第2第3の居場所があることで落ち着いて学校に足を運ぶことができる。保健室やステップルームは子どもの抱える課題に対して総じて受容的であり、一方的に叱責されたり強引な指導を受けたりすることもない。すべての教室がステップルームのようであったなら、「不登校」は相当程度解消されるのではないかと思うほどである。丁寧な対応ができない状態の「教室」との落差をここでも感じさせられる。

おわりに

子どもたちが「不登校」になってから、「社会はそんなに甘くない」のだからもっと厳しく接したほうが良い、との「アドバイス」をよく受けることになった。「無理やりでも学校に行かせた方がいい」「勉強はどうするの?」「友達ができないのでは」「子どものわがままを許しているだけでは?」もううんざりするほどである。質問やアドバイスで問われるようなことは、もうすべて着手して、失敗し、後悔したものもある。勉強については真っ先に心配したし、手も尽くした。

そう、今の社会は「つらい問題を抱えて右往左往している側」がその他大勢に対して延々と今の状況を「ご説明」しないといけない理不尽さを抱えている。ご説明に納得いただけないと批判を受けるのである。しかし、「不登校」に限らずその問題の当事者や家族は中島(2021)の言葉を借りれば「はっきりとはわからない、それが辛いのです」という状態である。つらい側に過度に説明を求める社会からの脱却を強く望む。また研究者としての自身がたとえば調査の時などに「誰かに説明を強いていないか」自戒したい。

最後に、「不登校は『心の問題』ではない」ことを強調しておきたい。不登校を「解決」

「不登校」と生きる—はっきりとはわからない—それが辛いのです—

するにあたって、子どもの心のあり様に焦点を当ててアプローチするカウンセリング的手法が用いられることが多い。もちろんそうした取り組みを否定するつもりはないし、次男はセラピーを受けることで気持ちと向き合えるようになった。ただ、心の問題にばかり視点が集中すると「あの子の気持ちが変わらない」と子ども自身に変容を迫ることにつながりかねない。しかし変容すべきは学校であり、公教育であり、この社会の側ではないか。「学校にはいられない」という子どものメッセージを受け止める余裕こそが求められている。わが子を含めて、今つらい思いをしている子どもたちには「学校は、歯を食いしばっていくような場所ではない」ということを伝えたい。

謝辞

自分たちの直面している「不登校」について文章化することを理解してくれた子どもたちに感謝します。

また、文章化にあたり日本社会臨床学会での様々な議論に触発されました。参考文献にも挙げていますが、伊藤さんや中島さんの書かれたものに刺激を頂きました。ありがとうございます。

文献・資料

伊藤書佳 (2020) 「教育支配からの逃走、戦略はゾミアが知っていた」(広瀬義徳・桜井啓太編『自立へ追い立てられる社会』) インパクト出版会。

大阪府ホームページ「エンパワメントスクールに関すること」

(<https://www.pref.osaka.lg.jp/kokosaihenseibi/empower/index.html#!> 最終閲覧日 2022年12月2日)。

大牟羅良 (1958) 『ものいわぬ農民』岩波新書。

四方利明 (2020) 「学校のアジールをめぐる」(広瀬義徳・桜井啓太編『前掲書』)。

中島浩籌 (2021) 『「不登校」は心の問題なのか? 逃げる・ズレる、を考える』書籍工房早山。

松木宏史 (2014) 『「イクメン」考』(滋賀短期大学『乳幼児総合研究所 10年の歩み』)。

山岸竜治 (2018) 『不登校論の研究 本人・家族原因説と専門家の社会的責任』批評社。

- 1 長期間学校に行かない(行けない)状態のことを不登校と呼ぶようになって久しい。しかし、筆者は我が子の「不登校」に直面して、果たしてこの呼び名でよいのか、かといって「登校を拒否」しているわけでもないし…と違和感を感じている。ただふさわしい呼び名がすぐに見つかるわけでもなく、差し当たってカギカッコにくくって「不登校」と表記することにした。
- 2 エンパワメントスクールとは、大阪府立高校の中で「社会人として必要な『基礎学力』『考える力』『生き抜く力』をすべての生徒が身に付けることをめざして」いる高校である(大阪府ホームページ「エンパワメントスクールに関すること」)。長男の場合は、中学レベルの学習からやり直してくれるところが自分に合っていると考えたようだ。2022年末現在、8校がその指定を受けている。